
君の手に届かない

犬候

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手に届かない

【Nコード】

N0489M

【作者名】

犬候

【あらすじ】

俺には、付き合い始めてからかれこれ一年になる恋人がいる。

プロローグ

「君は、人を裏切ったことがあるか？」

放課後の教室。もう夕暮れをとくに過ぎて、薄闇に沈みつつある窓の外を眺めながら、彼女は俺にそんなことを問うた。

「藪から棒だな……まあ、あるよ」

首肯する俺に、彼女はかすかに頷く。

「そうか。……私もある」

「というかだ、自分は誰も、一度も人を裏切ったことは御座いませんなんて奴、存在するもんかね？」

「するだろう。自分は一度も嘘を吐いた事がないと主張する人間が存在するのだからな。そういう人間がいても、何ひとつ不思議なことはない」

「まあ、そうだな」

そう、結局は主観の問題なのだろう。誠実さの定義を議論するにとほど実りのないものはないだろう。

彼女は薄暗い空に一番星を探すように、少し顔を上向かせ、これは彼女が考え事を、特に適当な例を探すときの癖だった、

「例えばだ。……君がある国Aの首相だとしよう」

唐突に、そんなことを言った。他に妥当な例を思いつかなかったのだろうが、それにしても、会話に酷い飛躍がある。

「俺も出世したもんだな……」

黙って聞いていればよいであろうときに、どうしてもこう茶々を入れてしまうのは、何というか、俺の性分なのだろう。

とはいえ、彼女の話が飛躍しがちなのに、俺が慣れきっているように。……彼女も、俺のそういった言動に慣れきってはいるのだ。

「君は同盟国Bが雇った殺し屋に狙撃され死んだ。これは裏切りか？」

「それが裏切りでなくて何が裏切りだってんだ。……それにしても

短い夢だった」

「では、君がある国Bの首相だったでしょう」

「複雑な気分だな……」

「君は同盟国Cが雇った魔術師に呪いをかけられて死んだ。これは裏切りか？」

「……ちなみにそれ、呪いを掛けられた何年後に死んだんだ？」

「三十年後だ」

「……」

普通に考えて自然死だろ。それこそ、ファラオの呪いのようなものだ……。

「……呪いと俺の死の間の相関関係が、お前に証明できるか？」

「出来ない。だから魔術なのだ。どうだ、これは裏切りか？」

「ええと、そうだな……もしその同盟国Cつてのの首相が、呪いの効果を信じていたんだとすれば、それは裏切りだ」

「信じていなかったら？」

「ただのジョークだな。笑って許してやるよ。俺はイギリスがクロウリーを雇っていたつてもジョークだと信じたいが……」

「ふむ。私も君と同じように考える。……つまりだ、『裏切る』という行為は、その行為だけを見て判断することは出来ないということになる。自分と相手のいずれかが、相手を裏切ったと感じるか、相手に裏切られたと感じるかしなければ、そこにどんな行為があるうと、それは『裏切り』にはなりえない」

「当然っちゃあ当然の話だな」

「そうだな。これはただの前置きだ」

「あん？」

「……私は君を裏切ったことがある。それは恐らく、家族を人買いに売り払うのにも匹敵するような罪だ」

「……」

別にとぼけたって良かったのだろうし、彼女の言う意味がわからない振りをしたところで、その行為は誰に責められる者でもなかつ

ただろう。それでも俺は沈黙した。

誠実さの定義。俺は少なくとも君には、為し得る限り最大のそれを以て相對したいと願う。

でもまあ、実際のところ。

俺は君に対しては、他の誰に対するより明確にとっているのだろっけ。

「許してくれとは言わない」

「許すなんて、口が裂けても言えねえよ」

これは多分、本音だ。……そう、多分。

「それはただの道理だ」

「だが、そうだな。俺も、お前を裏切ったことがある。それがお前の罪に劣るとは、僭越ながら考えられねえ」

「……」

「許してもらおうとは思わない」

「許すなんて、死んだって言えないよ」

「それもただの道理だな」

「……いけないな、これじゃあただの馴れ合いじゃないか。そういう積みもりではなかったのだが」

「俺だって、別にそういう積みもりじゃあなかった。だったらいいだろう、さっきのあれと同じだ」

「私も君もそう考えていないのなら、それは馴れ合いではないと？ 余計悪いな、もうこれ以上べたべたするのは耐えられない」

「まあな。どうせべたべたするんなら」

「するのなら？ するのなら、一体何だというんだい？」

彼女は意地の悪い顔で笑う。妙な話ではあるのだが、彼女にはそういう表情が良く似合うと思うのだ。小悪魔的とはいい難い、古の大悪魔みたいな表情だが……それはこの上もなく、魅力的なものに見えるのだ。

「……まあ、良いじゃねえか」

「この甲斐性なしが」

「うるせえな、純情なのは血筋なんだ、放っておいてくれ」
だから俺は、そうやって誤魔化すのが精一杯なのだ。

「……幹久勇氣」

自分の名前というのは、これはやはり不思議なものだと思う。いかに込み入った雑踏にあっても、自分の名前だけは明瞭に聞き取れたりするものだ。犬にしたところで、『お手』だの『おかわり』だの（もうひとつはあえて書かない）という言葉は解さずとも、『ポチ』と名前を呼んでやると反応を示したりする。……まあ犬の場合に於いては、パプロフの某に説明されるように、単にその言葉を聞いた後で餌がもらえる確率が高いとか、遊んでもらえるかも知れないとか、そういったことに対して反応を返しているだけなのかもしれないが。

「はい」

現実から逃避するためのとりとめのない思考を遮断して、俺は立ちあがった。

「勉強熱心な君だけに、特別に小テストの機会を設けよう」

俺が熟睡していたのが、どうやらバレてしまったらしい。教師に見つからずに居眠りをするというのは、事実上不可能に近い事なのではあるが。

「……光荣であります」

「……」

俺としては、これは別段皮肉のつもりはなかったのだが……。まあ、最初に皮肉を言った方としては、そういう風にとらえるのは無理というものだろうか。嘘を吐いたことのない人間は、他人が嘘を吐いているかもしれないと疑う事は出来ない。逆も然り。……まあそういう事だ。

先生は若干表情を引きつらせながら、

「全ての残忍性は臆病から生じると言ったのは誰だ」

……その言葉は、今のあなたに贈りたい。もしあなたが人に愛されたいと望むなら、まずはあなたが人を愛さなければならぬ……。多分それ、教科書に載ってねえだろうがよ……。

とはいえ、これは運が良い。俺はローマには明るいだった。

「ああ……確かそれは、セネカでしたね……」

「……正解だ」

先生は、ある種あつけに取られたような表情でそう言った。毒を抜かれた、とでもいえば妥当なのだろうか。

「……ま、分かてるんじゃないが……よくそんな事を知っているな。もう座っていいぞ」

「……はい」

なんとも物分かりの良い先生だった。まあ良いとか言いながらも、授業態度の点は悪くつけるのだろうが　いや、これはただの逆恨みだ。

俺は再び眠りの世界へと沈んでゆく。

……心地よい感覚に、沈んでゆく。

しかし、それから間もなく　授業の終わりを告げる鐘に、俺の眠りは再び妨げられた。

「起立」

言われるままに立ちあがり、

「礼」

礼。……これは仕方がない、礼をしないと先生と目が合って気まぐずい思いをするのだ。……実際にしゅちゅうやるのだが、そういうときにしてもわざとではない。寝ているだけだ。そういう生理的に不可避な状況でなければ、別に意地を張ってまで礼をしないという程には、俺は反抗心が旺盛な人間ではなかった。

教師は荷物をまとめて、逃げるように教室を出て行き　教室はざわめきに埋もれる。

ふと気付いて、自分のノートに目を落とすが、板書は途中で途絶

えたままであった。慌てて残りを書きつつそうとするもの。これはすぐに諦めた。黒板に書かれた字が汚すぎてどうにもならないのだ。暗号を解読しているうちに、日直によって総ては黒板に還るだろう。睡魔を助長した要素は恐らくこれだったか。それでも、哲学の分野は誰かさんのせいでもかなり明るいという自負があるのだが、それでも単語の意味すらとれないというのは尋常なことではない。仕方がないので、後で誰かにノートを見せてもらおう事にする。……それにしても酷い字だ。果たして義務教育を受けたのだろうか。あの先生は、言う事は非常に分かりやすいのだが、字があまりにも汚過ぎた。

……とはいえ、寝ていたのでは何にもならない。そもそも口頭の説明があれば、あのように難解な、それ自体が解読を求めるような文字であろうとも、読み解くことは可能であるはずなのだ。その点は大いに反省しようと思う。

俺は哲学が嫌いではない。元々勉強という奴が大嫌いな俺にして、哲学だけは学ぶに値するものだと考えている。俺はなににも、哲学的思考の崇高さや冗長性を讃美するつもりはない。俺が哲学に対して一定の評価を与えているのは、それが俺から世界を遠ざけてくれるからだ。哲学者の言葉は、自ら思考せずとも、俺に真理のようなものを与えてくれる。

「ッ」

大きく一つ伸びをして、俺は教室の後ろの方を窺った。そこでは二人の女子生徒が、仲良く雑談に興じている。遠目に見ている分には微笑ましい光景だ。特定の毒虫じゃあるまいし、距離を取ってさえいれば害は及ばない。

………それを知っていてなお近づいて行く俺は、一体何なのだろうか？

「仲いいよな、お前ら……」

「何よ、素直に喜べばいいでしょう。両手に花なんだから」

立っている方の女子生徒が、笑いながらそう言う。

若干赤みがかった　これは生来のものらしい　セミロングの髪。黒目がちな瞳が印象的な彼女の名は、咲村綾瀬さきむら あやせという。見た目は愛らしいのだが、中身は意外と難儀な性格で、正直何を考えているのかよくわからない。

ええと、その、何だ。色々、あつて。

そんなこんなで、綾瀬とはかれこれ一年間ほどお付き合いをさせてもらっている。非常に言い辛いというかアレなのだが、未だにプラトニック（糞が、今笑った奴は呪われる）な関係である。

……でもまあ、何というのか。実際俺なんかより、鑑波かがなみのほうが仲が良いとは思うのだが。始終べったりという表現が適切なくらいに、二人はいつも一緒にいる。

「まったくもってそのとおりだな。恐らくは、君の身には過ぎた榮譽だというのに」

そして、座っているほうの女子生徒が、件の鑑波優希かがなみ ゆうき。こんな喋り方だがれっきとした女だ。いわゆる幼馴染というやつで、小さいころ確認したからそれは間違いない。髪が非常に長くて、見た目ことう　凜としていても言えいいのだろうか。鼻眞目を別にしても、かなり綺麗な造作をしていると思うが……口調がそうであるように、中身も多少変わっているのがボトルネックになるのかもしれない。そのわりに、あまりくびれのあるほうではないのだが。痩せ気味なのは許容範囲としても、要所要所の肉付きが悪　いや、その話は止そう。

ここ一年くらいは没交渉気味になっていたが、別に喧嘩をしたとかそういうことはない。クラスメイトでもあることだし、仲は良い方だと思う。

「花は花でも、片方は毒の花、もう片方は棘の花じゃねえか」

「一応、社交辞令で聞くと、どつとが毒でどつちが棘なの？」

「……………」

どっちもどっちだ、とは流石に言えず。

「……まあ、いいじゃねえか」

そんなところで、俺はお茶を濁した。

「ところで、俺は次の休み時間に外に出て、何か買ってこようと思うんだ……何か買ってきて欲しいものはあるか？」

外に出るというのは、学校を抜け出すという事だ。露見したら説教くらいは貰うだろうが、まあその程度のことだろう。校内には購買部もある事だし、危険を冒してまで外に出ようという生徒の数は多くないが、まあ皆無という事もなかった。俺という実例もあることだし。何にしろ、購買部の品揃えはたかが知れているのだ。菓子類は皆無だし、ジャンプもマガジンもサンデーもない。これは辛く耐えがたいことだ。

「そうね……………」

綾瀬は少し考えるようにしてから、

「BLAM! で霧亥が食べていた、あのカロリーメイト風の食品が食べたいわ」

凄まじい無茶振りをした。

「……カロリーメイトでいいか？」

「だめよ……カロリーメイトは、食べてもシャキツサクツて音がしないじゃない」

まあ……な。確かにあれば、俺にも非常に美味そうに見えた。俺もあれを読んでからカロリーメイトを食って、妄想との間の落差に絶望を覚えた記憶があることであるし。いや、カロリーメイト自体は文句なしに美味いんだが……何というのか。やはり妄想を超える現実には存在し得ないとも言っのか。……言うまでもなく冗談だが「それこそネットスフィアにでも頼んでくれ……じゃあ何もいらないんだな？」

「ねるねるねるね……………」

「……………」

「ねるねるねるねで、乾人ごっこをしましょう」

「……まあ、いいけどな。そうだ、お前が魔女の真似をしたら買ってきてやるう」

「ひひひ」

綾瀬は奇声を上げて笑ってみせた。

……まさか本当にやってくれるとは思わなかったのだが……。というか、嵌まり過ぎだった。

「鑑波は？」

「……えっ、あ、いや。私はいいよ」

「そうか？」

「……うん」

最近、鑑波はいつもこんな感じだ。単純に元気がないというよりは、……何だろう、何かこう、ひどくぎくしゃくしているとでも言えばいいのか、そんな感じがする。今みたいに、うわの空になることも多くなった。こういう奴なんだと、そういうふうに思いこんでしまえば楽なのだろうけれど、俺は腐っても十年近い付き合いがあるから、そういうわけにもいかない。とにかく、気がかりだった。

「幹久」

「あん？」

思考を断ち切る、男の声。振り返ると、後ろの席の宮崎が、呆れたような顔で突っ立っていた。こいつとはかれこれ三年の付き合い

三年間同じクラスで同じ位置関係、の意になる。愛想はないが、これでなかなか頼りになる奴だ。

「黒板をの前を見てみる」

俺は言われるままに、黒板の方に目を向ける。そら見たことか、板書の半分はもうすでに消えて、黒板は黒板という名に相応しい、あるべき姿へと還りつつあった。やはり俺には先見の明があると言わざるを得ないが、しかし。そこで俺は違和感を感じた。爪先立ちになり必死に背を伸ばして、黒板の上部に書かれた文字を消そうとしているあれは、どう見たところで、俺の隣の席の三上さんにし

が見えない。と、いうことは。

「日直とは、俺か」

「お前だよ、馬鹿。とっとと行け」

「……悪い、忘れてた」

宮崎に促されるまでもない。俺は黒板の前に急いだ。三上さんもその頃には諦めの域に達していたのか、それとも単に体力が限界を迎えたのかは分からないが、黒板の上部は見ないことにしているようだった。

「悪い、残りは俺がやるよ」

「あ、うん……」

疲弊したように、或いは俺を非難するような感じに、三上さんが答える。

「こんなこと言えた義理じゃねえけど、こういうときは言ってくれよ」

「うん……いやね、三上君ってば、授業が終わった途端に飛び起きて、鑑波さんのところに行ったから……何か用事があるのかなあって、思ってた」

「……いや、それはアレだ、俺はそういう奴なんだよ。俺の生態だの都合は置いておいて、三上さんの都合で呼んでくれていいから……」

「うん。わかった。次からは、言われなくともとっとと来てね」

「……はい」

そんな事をしているうちに、始業の鐘が鳴り始める。俺達は慌てて黒板消しを放りだし、自分の席へと急いだ。

前の時間の哲学担当の教師は、何かに追われるようにして去っていったが、今度教室に入ってきた現国担当の教師も、まるで何かに追われているかのように戸を閉め、教卓に自前の教材を放り出した。不思議な話だ、追い回されているのは、結局のところ俺達生徒のはずなのだが、追うはずの側が、何故そうも追い詰められたような挙動を示すのか。

「起立」

俺は益体もない思考を振り払って、

「礼」

今度こそは真面目に授業を受けようと決意した。

一話

揚げ物というのは、一体何故、機能食品として賛美されないのだろうか。タンパク質と脂肪と炭水化物を一度にそれも大量に摂取することが出来る素晴らしい食品ではないか。まあ、その脂肪が良くないといえばそうなのかも知れないが、しかし脂肪というのは大変に熱効率の良い栄養素であるはずなのだ。

……ああ、やはり問題はそこか。熱効率が良いという事は、そのまま代謝が悪いと言い換えられる。あちらを立てればこちらが立たず。相反する要素が存在する限り、総てを満たすのは不可能だ。このことは、口で茶を飲みながら鼻から炭酸水を飲むことが現実的に不可能であるという事から容易に証明することが可能である。まあ、する必要もないだろうが。

ま、今現在は太らない体質であるところの俺には縁遠い話だが、しかし十年後に十年後には、切実な問題になって来るのかも知れなかった。

「……………」

昼休み。現在、俺と綾瀬は、美術室で昼食をとっている最中であつた。

少し気になって、綾瀬の弁当箱を覗いてみる。やはり揚げ物の類は存在しないが……何というか、実に食欲をそそられるような弁当だった。自分でつくつたと言っていたから、綾瀬は料理が得意なのかも知れない。鑑波とは大違いだ。俺は、あいつは母親が弁当を作ることが出来なかったとき、アボカドを一つだけ持ってきて、それをカッターで剥いて食っているのを見た事があつた……。

「……勇氣」

「ん。何？」

その声で、俺は弁当の世界から引き戻された。とはいえ余韻は未だ残る。紫蘇とチーズのハーモニーが二律背反で差延だ。自分でも

何を言っているのかわからない。要するに、俺は一瞬前まで忘我郷にいた。

「これはあなたの本？」

綾瀬は、その手に一冊の文庫本を持っていた。

「あ……あー、そうだ、俺のだよ。一体何処に行ったのかと、それこそ半ば諦めていたんだがよ……どこにあった？」

「勇気の机の上」

「……流石にそんな所にあつたら、俺だつて気付くはずなんだ」

「……にあつたから、今の今まで、勝手に借りていたの」

「酷い話だな……」

「というか、酷い奴だ。」

「ほぼあなたの私物であろうという確信があつたから、まあいいかなと」

「良いわけねえだろ。……いや、まあ別に構わねえけど」

私物を持つていかれるのは、実際あまり好きではない　まあ好きな奴はいないだろうが、俺は割合そういうのが気になる方である。所有欲が強いのかも知れない……などと自己分析の真似ごとをしてはみるものの、こんなのはやはり真似ごと止まりだ。

「そう。それは何より……ところで。優希はポオが好きなの？」

「ああ。モルグ街なんかは、正直あれはどうかと思うけど……でも好きだな。ここだけの話、俺の初恋はリジアだった」

ここだけと言つておいて気付いた。そういや、あいつにも話したことがあつたよなあ……。ま、口には決して出せないが。

「度し難い変態なんだね……」

「……お前さ、他人の気持ちを慮つたことはあるか？」

「慮つていなかったら、今頃あなたは屋上の柵を越えているところじゃないかな……」

「……まあいいや。で　そう。お前はどうかんだ。その文庫本にリジアはない筈だから、その口ぶりだと読んだことあるんだろか……お前だつて、割合本は読むほうだろ」

……鑑波程では、ないにしろ。口に出すことは何とか思いとどまる事が出来たが……これで綾瀬が気付かないという事もないはずだ。しかし綾瀬は、素知らぬふりで会話をつづけてくれた。

「そうだね……私も好きだよ。シニョーラ・サイキ・ゼノビアは、私が二番目に尊敬に値すると思うジャーナリストね」

「ああ……ええと……そんなに嫌いなのか、ジャーナリスト」というか、あれはジャーナリストじゃないと思うんだが……。

「そうでもないけれど」

「参考までに聞くんだが、一番目は誰なんだ？」

「エドウィン・M・リブリッジ」

「……もしかして、死んだジャーナリストだけが良いジャーナリストだとも言うつもりか？」

「長期的にみれば、死なない人間などいない。それは考えすぎで、穿ち過ぎだよ。……とはいえ、その意見には賛成だけれど」

「考えすぎ、ね……初めて言われたぜ、そんなの。迂闊な奴だとはよく言われるんだがな」

主に鑑波に、だが。

綾瀬は、自慢の髪を、食事のときはピンで留めて邪魔にならないようにしていた。

「他人の人格を想像で歪めるのは良くない　なんて言うわよね」「ん？」

いきなり話題が飛ぶのは、綾瀬にもよくあることだった。出会った当初はさほどでもなかったように思うので、恐らくは鑑波にうつされたというところだろう。あるいはまあ、俺が知らなかっただけで、もともとそういう人間だったのか。……まあ、きっとそちらのほうが正解だろう。これはこういう、とりとめのない女なのだろう。理解の放棄は、有限であるところの現実生活における時間という概念を効率よく消費していくためには、恐らく必要悪とも言つべき行為であるはずだ。……とはいえ、現在交際している相手に対してそれを行うのは、不遜であるようにも思ったが。

……理解などしなくとも、会話は成り立つ。人と人のおける断絶は、もはや決定的なものなのだろうか。

なんて、考えちゃいねえけど。端的に言えば、面倒なのだ。

怠惰。どちらにしる害悪かよ。

「ああ、確かに。その割に、相手の気持ちを想像しなさいなんて風にも言うけどな」

「そうね。あの言葉は本当に不毛だと思う。想像は良いけれど妄想は駄目。想像と妄想の間に、一体どれほどの違いがあるのかしら」
「他人にとって。観測される側にとって有害であるかそうでないかってなところだろ」

「そうね……要するに、それだけのことなのに」

大抵の分類は、それで事足りるのではないかと思う。是か非か。実用的な概念ほど、そうやって分類されることが多いように思う。

「他人なんていう存在は、結局のところ主観の中に存在する幻想なのに……ね」

「……………」

生理なのか？ とよほど聞こうかと思ったが、過去の記憶のお陰で思いとどまる事が出来た。そのときの相手は鑑波だったが、一生記憶に残る程の怒られ方をした。女、怖い。

というか、もっと楽しい話題はないのだろうか。これでも俺達は、付き合ってるはずなのだが……。

まあしかし、綾瀬はこういう難儀な性格のお陰で、あの鑑波と気が合うのかも知れなかったわけで。そういう目で見ると、確かに綾瀬は、鑑波と似ている。……いや。綾瀬が鑑波に似ている、のだから。俺が異性を見る場合、その比較対象は常に鑑波優希であったから。幼馴染というのは、いかにも因果なものであるように思う。

「『あの人は、私の胸の中で生き続けている』 この言葉が、それを端的に表しているわね。誰もが妄想の中に生きている。主観から逃れ得る生物など存在しない。脳髓の牢獄。脳髓は牢獄よ」

そう言っ、綾瀬は机を撫でた。それは何気ない動作であったの

だろうが

「あ、痛」

綾瀬は言いながら、素早く手を引つ込めた。

「おいおい、血が出てんぞ」

「『いいかねお嬢さん、人が撃たれたなら、血は流れるものだ』。大したことはないよ」

「まあそうだろうがよ」

綾瀬は玉のように血が浮かんだ右手の親指を、口にくわえた。何となく、微笑ましい絵ではある。赤ちゃんプレイ？ 役者が逆か……。

「舐めれば治るよ。……それとも勇気が舐める？ もう舐めちゃったけど」

「遠慮するよ……」

「そう。残念ね」

幹久は残念な人ね。

綾瀬は本当に残念そうに、しばらくそうしていた。

「さて、と……」

綾瀬は親指を気にしながら、後片付けに取り掛かった。ふと時計を見ると、昼休みももう残り僅かだ。……アインシュタインの遺したあの言葉は、恐らくは一般相対性理論より圧倒的に正しい。

綾瀬は空になった弁当箱を、巾着袋にしまいながら言う。

「そろそろ昼休みもお終いね」

「そうだな」

「それだけ？」

綾瀬は意地悪そうに笑う。

「……あん？」

「折角こうして二人きりなのに」

「……止せよ」

俺達は本当に二人きりだった。綾瀬は美術部員である。彼女は『昼休みを使って、部活動で課題になっている絵を仕上げたい』とい

う口実をもつて、美術室の鍵を手に入れたらしい。悪い奴だ。まるで鑑波みたいな、或いは俺みたいな奴だった。類は友を呼び　朱は交われれば赤くなる。そのうえで情に竿など差してみる、もうどうなるかわからない。……いや、嫌という程に、分かるというものはあるが。正直、そういう事を考えると嫌になる。

「幹久は本当に甲斐性がないよね。いえ、それとも　何か、他の理由があるのかな」

「ねえよ。純情なのは血筋なんだ、放っておいてくれ」

完全な嘘だが。家で心が白いのは、それこそ俺くらいのものだ。

「別にいいけど……まさかとは思うけど、何も期待していなかったの？」

言いながら、綾瀬はこちらに身を乗り出してくる。近い　吐息すら届く距離。

「するかよ」

何とか、そうとだけ答える　と、

生暖かいものが、俺の頬を撫でていった。酷く生理的で生々しい、この感触は

「ぎやあッ！　な、何を、」

「幹久。これは嘘を付いている味だぜ」

「　お」

こ、こいつ　舐めた。俺の頬を舐めやがった……。犬にしか、舐められたことないのに　！

「『お』？　『う』の間違いじゃないの？　『ウはうれしいのウ』」

「お前はそんな事を言うために、俺の顔を舐めたのか！？」

「そうだよ。どんな味がしたのかというと、結局のところただの塩味ね……特に深みも何もない。まさか甘酸っぱいわけもない」

「当たり前だ……」

「初心なんだね……ええと」

「……………」

「一応、今が初キスだったんだけど……………」

「は……初めてがこれかよ」

「そう考えると……ああ、やったったかなーって……」

「後の祭りだ……」

俺も『ぎゃあ』とか言っちゃったしよ……。もう何が何やら。

そのとき計ったように、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り出した。同じ音階であるはずなのに、授業の終了を告げる鐘と休み時間を告げる鐘は、どうしてこれほどまでに、俺に与える印象が違うのだろうか。

脳髄は牢獄　か。

さ、楽しい時間もおこれでお開き。まあ実際のところ、丁度いいタイミングではあったんだが……これは正直な話、少しでも残念に感じた。何、気にすることはない。生きている限り、有限であるとはいえ次はある。

俺達は、とつとと美術室を後にした。

教室に戻り、ふと気になって鑑波の席を窺ったが……鑑波は、そこにはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489m/>

君の手に届かない

2010年10月11日01時38分発行